

## 最も短い詩としての俳句の性格（I）

山口 青邨

俳句は五七五調の十七字詩である。このことに就ては私は宿命論者である、十七字の詩といふことは俳句のもつ宿命である、十七字ではいけないと言はれても仕方がない、そんなちっぽけな形では滅びる——とおどかされても仕方がない、こんな調、こんな形式は、俳句のもつて生れた性質なのである。お前は丈が低いとか、色が黄色だと言はれても、今更どうにも仕方がないのである。

俳句は十七字詩として今日存在してゐる。これををその根源にさかのぼつて、俳諧連歌にまでもつて行けば百韻でも千韻でも、幾らでも長くすることが出来る、或る人は俳句はこの時代に歸るべきだといふ、然しこれはそんなことこは俳句の生きる道とは思えない。